

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<Translation> Mark E. Caprio, Japanese Assimilation Policies in Colonial Korea, 1910-1945, Seattle : University of Washington Press, 2009. Introduction: Colonial Administration Decisions.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤阪, 俊一, 李, 慶姫, 徳間, 一芽 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/311

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



翻訳

マーク・E・カプリオ 著

『1910年から1945年にかけての植民地朝鮮における日本の同化政策』
(序章 植民地統治の決定)

Mark E. Caprio, *Japanese Assimilation Policies in Colonial Korea, 1910-1945*, Seattle: University of Washington Press, 2009. Introduction: Colonial Administration Decisions.

赤 阪 俊 一・李 慶 姫・徳 間 一 芽 訳

AKASAKA, Shunichi LEE, Kyonghee TOKUMA, Hajime

総督府から出版された月刊誌『朝鮮』（1940年3月号）に誇り高き朝鮮人の父親により投稿されたわずか3ページの記事は、「長男が志願兵になる」という一文から始まった。¹⁾彼の誇りは、息子が入隊したということのみ起因していたのではなかった。というのもその2年前、朝鮮人男子が志願兵として帝国に奉仕する特権を許す法令を日本政府が発布した時に、皇民としての彼らの地位は上がっており、彼は息子の成功に埋め込まれたものが、とりもなおさず同胞の成功であると見なしたからだ。この改革によって、朝鮮大衆を適切な行動へと向かわせることのできる植民地政策のレトリックに沿う方向で日本が最終的に重要な歩みを進めていると見る朝鮮人もいた。²⁾

京城で鐘路警防団長を務めるかたわら、総督府の中樞院参議にも就いていた曹秉相は、この随筆の中で繰り返しふたつの点を強調した。彼がまず強調したのは自分の長男に日本軍入隊を勧めたことであった。曹は息子を捧げることにより、朝鮮の伝統的な血縁重視の考え方から自由であることを明らかにした。この行為の意義を詳細に説明する必要はないだろう。繰り返し発せられる彼の「長男」という言葉だけでも、日本および朝鮮の読者が共有する儒教的伝統のゆえに、この犠牲がいかに大きなものであるかを双方が理解したからである。韓国併合以来、朝鮮人同化の容易さを論じるため日本はこの共通の伝

統を利用してきた。

また曹は、彼の息子の功績を示すことにより、日本人の読者層が、この犠牲を伝統（家族／血縁）よりも近代（国家／帝国）を受容する朝鮮という、朝鮮人に幅広く共有されている趨勢をなすものとして理解してくれるだろうと信じた。彼の犠牲は例外であったのではなく、むしろ朝鮮人の間でますます一般的になりつつある動向だと、日本が認めることを彼は願った。曹はこの方向性への変化は併合以来始まったと説明した。当時すべての朝鮮人が併合を認めていたわけではないが、朝鮮半島で起きた1910年の日本による併合は、「寂しい」方向に向かっていた国を救ってくれた。併合はまた朝鮮の人々を以下の三つのグループに分けることとなった。「本当の日本人」になることを約束してくれている日本人を信じた親日派、民族自決による独立によってのみ朝鮮は救われねばならないと信じた排日派、これら極端な立場の間で右往左往していた灰色存在の三つの集団である。³⁾1931年9月の満州事変以来、曹は一般大衆の心情が日本に好意的なものへと変わっていったと主張した。多くの排日派朝鮮人は中道・中立的グループに加わり、そしてこの中立的グループの構成員らの心情は、親日派の方向へ傾いた。1937年7月の盧溝橋事件はこの傾向をいっそう加速させた。こうした状況でかなり明白なことは、曹の強調するところでは、朝鮮の人々が彼らの民族的な心情と

キーワード：同化、植民地、朝鮮

Key words : assimilation, colony, Korea

日本の帝國的使命を結び合わせることを切に願っていたことである。

こうした結論から、この使命に関して日本が朝鮮人の支持を受け入れる必要があるという、曹の第二のポイントが導き出される。彼の示すところによると朝鮮の人々の「真の要求」は本当の日本人になることである。朝鮮人が期待したのは、半島民と内地人は日本人という全体集合の中の同等の部分集合であるということであった。さらに曹は、自分の望みは一人の朝鮮人の欲求以上のものであり、むしろ「半島民全部の声」を反映したものであると信じた。朝鮮の若者に帝国を守る存在であることを認めることによって、朝鮮総督府は「内鮮一体」の実現に向けて重要な一歩を踏み出していた。朝鮮の人々は自己の役割を全うするが、日本人には朝鮮人を自分たちと同等であると認める覚悟が果たしてあるのかという、日本に対する曹の問いかけは、それとなくではあるが明確であった。この結論はまた、単純に日本が朝鮮を併合するというだけではなく、より幅広い状況に対応できる政策次第では、朝鮮の同化を曹が支持する立場をとりうるということを示唆していた。むしろ彼が夢見たのは、朝鮮と日本のもっと強い結びつきの中でふたつの民族が同化していくことであった。日本の朝鮮統治は、「日本と朝鮮が一体化する可能性を実現する」ために、両民族の共存と共栄の実現を目指したということ、彼は彼の読者たちに思い出させた。⁴⁾

日本の同化政策を支持するまた別の朝鮮人たちも、同じような関心を探った。彼らは曹と同様日本の軍隊へ朝鮮人を受け入れる日本の決定を肯定的なしるしとして歓迎した。19世紀末の朝鮮で改革運動の指導者だった尹致昊は、日本の戦時政策に朝鮮人に関わらせるべく積極的に活動した。彼は朝鮮人男子に日本軍入隊を勧め、壮行会にも加わり、前線で生き残って帰還した者については温かく故国に迎えた。⁵⁾ 徐椿は総督府の機関紙であった毎日新報の主筆をする以前の1919年2月に東京でおこなわれた朝鮮独立示威運動（二・八独立宣言）の組織化を手助けしていたが、彼も軍隊に朝鮮人を入れるという日本の決定に勇気づけられた。1942年には、最終的に帝国一般徴兵制に朝鮮の若者を含めることとした日本の計

画を聞いたときに朝鮮人が感じた「感激」について彼は書いた。⁶⁾

この兩名は、日本人がこのような熱意を共有しているかどうかという曹の関心に同調した。植民者は果たして、朝鮮の人々が併合以来蒙ってきた犠牲や進歩を認めているのだろうか。尹は1939年7月に「内鮮一体」を議題とした円卓会議に参加し、豪華な朝鮮ホテルでこのテーマについて語りかけた。彼が1939年7月3日に書き込んだ日記には、日本は差別政策をやめるべきであるが、朝鮮人の方も日本人から尊敬される榮譽を得るべく努めねばならないと、彼から植民者への提言が要約されている。彼の言葉には、責任ある立場の朝鮮人に対して日本人が報いることができていないことがほのめかされている。朝鮮人は全体としてみたら「高度な責任感と公德心」を持ち合わせていないが、「個々の朝鮮人が日本の効率性の基準に達している場合には、差別待遇がなされるべきではない。」⁷⁾ 徐椿は、程度の差はあれ、あらゆる朝鮮人は「天皇の兵士」とであると信じ、大東亜共栄圏を作りあげるための「聖業」において朝鮮人が日本人と区別がつけられない精兵であると自ら証明するよう促した。⁸⁾

朝鮮人を同化するというその崇高な約束を適切な政策で保証すべしという、日本に対するこの主張は、少数意見ではあったが、本書においては、批判的な反応を示すものとして扱う。多数の朝鮮人は曹の“発言”を共有してはいなかったし、自分たち自身がどんな形態であれ帝国の兵士になるとは考えてもいなかった。満州事変は日本と朝鮮の関係に明らかに肯定的な影響を及ぼしたが、他方多くの朝鮮人は同化を要請する日本に対して、日本の政策と日本の存在への消極的あるいは積極的抵抗で応答し続けた。同化政策の対象であった朝鮮人の発言は、批判的なものも肯定的なものも両方とも、朝鮮における日本の同化政策についての我々の理解および評価に重要なひろがりをもたらしてくれる。

本書は、帝国において日本人が思い描いた朝鮮人の役割に関する立場を確認するため、幅広い歴史状況における同化を検討する。まず西欧の植民地支配の例を検討して、当時の世界的規模での政治状況を理解し、次にこれらの例が日本の植民地支配の決定

に及ぼした程度を確認する。後者については以下のことを考察する。日本人の同化政策についての考え方は、朝鮮での三十有余年間の統治の間にどのように変わったのか。日本語、日本文化、そして日本社会を受け入れることのメリットについて朝鮮人を教育するために日本人はどのような手段をとったのか。また成功の程度をどのように測定したのか。そして最後に、この政策の対象であった朝鮮人は日本の同化の提案にどう反応したか。曹、尹そして徐は3人とも朝鮮人の軍隊への参加は同化のレトリックと適切な実践を一致させようとする日本の意思の表れだと指摘した。総督府は自分たちへの信任を促すために朝鮮の少年たちを無謀な戦争へと派遣すること以外に、他にどのような希望もしくは理由づけを提供したのか。

内部的、周縁的、外部的植民地拡張

日本は、新しい領域を併合する上で、新しい臣民を支配する行政機構としてどのような組織を作り上げるのかという、最も重要な選択をなさねばならなかった。当時一般的に植民地研究者と植民地官僚は、植民地公権力としてフランス型の直接統治（同化政策）とイギリス型の間接統治（連携政策）のうち、どちらを採用するべきかを模索していた。この選択の決定に際しては、国民の好みが反映されることが示唆される。より正確には、植民者と被植民者の関係に基づいていた。植民者はフランス人、イギリス人を含め、その統治手段を、彼らが植民地化する人たちとの地理的、人種の近さに基づいて決定した。

ここで問題なのは、「植民地化される側の人々」に関しての我々のイメージである。とりわけ「植民地化された」領域を構成するものは何か。どんな人たちが「植民地化された」のか。植民地化に関する歴史叙述を精査することにより、これらの問いに対する答えはその時代の地政学によってかなり決定されることが示される。解放された国家は植民地化されたといえるし、組み込まれた地域は植民地化されたとはいえない。他の国家の一部として残された領域に関しては、この議論から除外する。イギリスの歴史叙述の文脈でいえば、解放されたインドとビルマ（現ミャンマー）は植民地化されていたが、ウェー

ルズとスコットランドは違う。⁹⁾ 日本の場合、朝鮮と台湾は植民地化されたが、沖縄と北海道はこれにあたらない。また別の要因は、征服者とは異なる人種と文化をもった人々が「植民地化される」という、我々の伝統的なイメージに関連している。たとえばブルース・カミングスは日本による朝鮮の植民地化が人種的、文化的に等しい人々の征服として唯一の事例だと記した。¹⁰⁾ 日本人が朝鮮を（植民地化するよりむしろ）統合できたのはなぜなのかという、第一の理由として、日本人は繰り返し朝鮮との類似点をあげた。

同化政策の実践者に用いられたこのレトリックは、「植民地化」を定義するためにはもっとニュアンスに富んだものが必要であることも示唆する。理論上、同化政策は、拡大した国民国家における平等な地位の構成員として、植民者と被植民者はやがて協力し合うだろうという考えを発展させた。アフリカにおける帝国の黒人代表が、フランス国内の一地方から来た白人代表とともに国民議会に加わることができると想像したことにおいて、フランス人は例外的であった。彼らの実践は、「下等な」人種を文明に高めることはできないと主張した社会進化論者から批判をされた。たいていの実践家らは、植民地の中心に隣接する人種的に類似した人々の住む領域については限定的な同化政策を採用した。彼らのレトリックは、もし被植民者が植民者の習慣、言語、政治形態を取り入れるならば、植民者と対等の立場を得られるという可能性をちらつかせるというものだった。この意味で、同化政策を推進する目的は、国家の構成員に共通の文化と政治制度を普及させることを目指す国家建設の目的と似ていた。我々はこれらふたつを、種類の違いというより程度と実践の違いとして議論していく。

隣接している国、あるいは近隣の国へ広がる膨張とは分けて考えるために多くの研究は多様なレベルで植民地主義を明確にしてきた。これは海外国土の略奪という植民地主義のより伝統的な印象とは断絶しており、「植民地化される人々」についての拡大された概念を提供してくれる。ハンナ・アーレントはより伝統的な「海外帝国主義」から「汎民族運動」を区別するために「大陸帝国主義」——「植民地と

本国間の政治手段と政治制度にどんな地理的懸隔も考慮しない首尾一貫した拡張——の考えを導入した。¹¹⁾ マイケル・ヘクターはイギリスにおけるケルト人の同化を扱っているが、内部的に植民地化されたウェールズ人、スコットランド人、アイルランド人がなぜ国教会を信じるイングランド人とは異なるアイデンティティを維持したかという問いに対し、彼もまた「内部的」植民地化と「外部的」植民地化という言葉を用いる。¹²⁾ ハロルド・ウォルプの（「一般的」植民地主義に対する）「内部的」植民地主義は、イスラエルの中のアラブ人、アメリカの黒人、そして南アフリカの黒人などを含めた「ある特定社会の内部的」状況を考慮する。¹³⁾

ウォルプの「内部的」植民地化は、国境内に居住している文化的に征服されたマイノリティを被植民者とみなすことで、我々の定義をよりいっそう広げてくれる。このように外国に居住しているということは、人々が植民地化されるとみなされることの必須条件ではなくなる。他の研究者は、植民地自体を国民国家建設とみなすところまでこの定義を広げた。パルタ・チャタジーが、「植民地国家と近代国家のタイプとしての差異を明確にすることは、何か有用となる分析」に役立つかどうか疑うとき、両者の類似性を示唆しているのだ。¹⁴⁾ヘゲモニーを握る「上位」文化による「下位」文化の従属としてナショナリズムを定義するアーネスト・ゲラーは、植民活動を次のように考える。

ナショナリズムとはつまるところ上位文化のある社会に全般的に押し付けることなのだ。しかしその社会がもともともっていた下位文化は大部分の人々、そしてある場合には、住民全体の生活を支配していた。そのことが意味しているのは、学校で教えられ、学界で管理された語法が全体的に拡散し、官僚による通知、また技術の伝達に関してかなりの正確さが必要とされるために法制化されるということなのだ。それは、微細集団自体によって地方的に独特なありようで再生産されていた民衆文化によって支えられていた、地方集団のもともとの複雑な関係に代わって、とりわけ文化のこの種の共有に

よって相互に結び付けられていた個人が、相互に交換可能な、アトム化された個人となってしまふような、匿名的で人間味のない社会の成立なのだ。それが“実際”起こることなのだ。¹⁵⁾

この「押し付け」が外国人に強制されたとき、「ナショナリズム」はたちまち「植民地主義」に転化する。この二つの概念は区別されねばならないが、それは種類の違いというのではない。ベネディクト・アンダーソンの言葉を使えば、「ネーションを作り出す」プロセスは「共同の聖餐コミュニオンのイメージ」¹⁶⁾へと受け入れられるエスニック集団を決定することが含まれた。したがって帝国が新規に領土を獲得するとき、この新しい領土が帝国にどのように適合するかについてあらためて考え直す必要があった。もっとも基本的な考慮の中に、この領土が間接的な連携政策、あるいは直接的な同化政策のどちらによって統治されるかの決定が含まれた。国民国家の周縁に居住していた人々——物理的に離れているか、あるいは社会的に周縁化されているかのどちらかであるが——はすぐさま内部的なコミュニティに入ることはできなかった。彼らには文明化の程度次第で条件をつけてそのメンバーへの資格が与えられた。この違いが、本書の重要な考察、つまり帝国における人々の場を決定する要素に注意を向けさせる。同化政策を通して、外国人は国民国家の市民となることができたのか。もしそうであるならどのような要素が彼らの地位の変化に影響を与えたのか。この政策が対象とした人々、つまり植民地化された人々は、どの程度まで帝国における自分たちの地位に影響を与えることができたのか。¹⁷⁾

植民地にするかどうかの決定は、行政機構による被植民者の統治と同様に、主として植民する側の必要性和利害関係に基づいており、植民される側の必要性和利害関係には最低限の配慮しか払われなかった。植民者は一般的に統治方式を、懐柔型の外部的植民地化から搾取型の内部的植民地化に至る、統治機構の大まかな三段階のレベルの中から選択した。そして中間的な位置を占めたのが周縁の植民地主義であった。植民者は遠隔地において外部的植民地化——アーレントの海外帝国主義、およびヘクターの

外部的植民地主義と対応する——を取り入れたのだが、そこにおける彼らの間接的統治政策は、本国と同一の裁判権の下に被植民者との政治的、社会的、文化的紐帯を構築することに最低限の努力しか払おうとしなかった。¹⁸⁾ 植民者は地理的、人種的に本国と異なる住民を管理するべく従事させられていたのだが、これらの人々と文化的に関係をもつことを（たとえあつたとしても）ほとんど求めなかった。植民者らは、「彼らの不合理なありよう」を変えてしまうよりもむしろ「それを愛するようにすらなってしまう」。¹⁹⁾ これらの人々を文明化させるという彼らの「使命」は、自分たちの植民地的征服を正当化するための優越性の神話を強化することだった。植民者らは、人間と資本の投資を最小限に抑えつつも、土地から資源を根こそぎ奪い、徹底的に人々から労働力を搾取した。外部的植民地主義の第一の狙いは経済的なものであるが、植民地の位置が植民権力の保有する他の領土の安全保障に役立つ場合には、防衛に対する関心が生じてきた。²⁰⁾

外部的植民地化のアンチテーゼは、内部的植民地化、つまり国民として人々に同化を強いること、言い換えればネーションの建設であり、植民者に二番目の選択肢を提供することになった。²¹⁾ 人々の政治的忠誠心を確保するのを第一の目的として、植民地代理人の中核となった人々は、構成民族に（本国の）ヘゲモニー的文化を普及するのに必要な政治機構を管理することを引き受けた。これらの人々は、後に国民国家の国語として機能することになる方言を選びだしたが、それはこれを構成する人々に国民国家の成員となることを教えるためであり、彼らはまた国民国家へ参加させるための教育、マスメディア、軍隊のような国民国家を作り上げる制度構築を先導した。さらに彼らは被植民者から新しい忠誠を紡ぎだし、かつそれを思い起こさせるための国家的イベントやシンボル（国民の休日、国旗、通貨、国歌）を作り出した。内部的植民地化の成功は、政治組織が伝統的に維持されてきた地方の政治的、社会的、文化的障害物を除去することができるかどうかについての新しく形成された国家の能力次第であった。国家の臣民として人々を同化することに失敗した行政管理者は無能であると告発され、また「不適

切な統治」、つまり植民諸権力が自分たちの介入を正当化するためにその領土へついているのが不充分であるという非難に直面した。

内部的植民地化に求められた統合の緊密なレベル、そしてその構成民族の間に想定された強力な地理的、歴史的紐帯のため、内部植民地の周縁に居住する人々にはこのアプローチは不適切なものであった。しかしこれらの人々はすぐ近くにいたため、彼らからの忠誠心を確保するべく絆が作り上げられることが必要であった。住民の植民地化を正当化するために作られたイメージは、地理的、または歴史的類似性よりも文化的差異であったが、内部的な臣民として彼らを組み入れることは、縦の関係を想定することで不可能となった。したがって周縁の植民地化——アーレントのいう大陸帝国主義とヘクターがいうところの内部的植民地主義——は被植民者の前に、内部の市民として彼らを同化するという約束をちらつかせた中間的段階として機能したが、しかし常にこの未来図を台無しにしてしまうような政策が導入され続けていた。²²⁾ このように同化政策は政治的前提というよりもむしろレトリカルな目標としての役割を果たした。人々の生活への深刻な介入は、植民地の中心を地域のライバルから守るための戦略的緩衝装置として、周縁の領土がもっとも大きな責任を果たすことができることを反映していたのだ。

多くの要素が領土拡張論者による行政政策の選択に影響を与えた。彼らが植民地住民をどのように理解しているかということがその決定において重要な役割を果たした。こうした理解は、国家における国民形成の際、被植民地住民が正規メンバーとして統合されるべき程度を決定した。本国からの地理的な近さは重要ではあるが、決定的要素ではない。植民地関係文献の中で「内部的」として挙げられた多くの例は、本書では「周縁的」、さらには「外部的」とさえ見なしている場合がある。例えばアメリカに居住する黒人およびネイティブ・アメリカンは、白人のアメリカ市民なら無条件に厚遇された諸制度から制度的に排除されていた。対照的に外部的植民地における植民者側の代理人は、表向きは被植民者と植民者を仲介する者として振舞うべく訓練するという理由で、植民者側の子供たちと同等（あるいはそ

れ以上)の教育を提供することによって、一般的にその土地のエリートを選び出したのである。

内部的植民者と周縁的植民者の間のひとつの重要な違いは、植民される側をどこに置かを決めたレトリックにおける統語法上の位置であった。内部的植民地の行政機構は、ヘゲモニックな統治と文化という言葉と、イデオロギーに関する規範に基づいて被植民者を社会化していくことによって、国民主体、つまり決められたやり方で行動するように期待された国民国家の主体としての自分たちの役割を受け入れるよう被植民者を説得した。他方、周縁的植民地行政機構は、被植民者を変革されるべき客体として、つまり国民国家の主体として自分たちを受け入れてもらうには自らが劣等であることを覚悟しなければならない者と規定した。同化政策は両ケースにおいて文明化の過程であったが、しかしこれは内部的な場合より周縁的な場合においてより強く明確に表れていた。同化政策は、劣等な人々が、内部的臣民の場合のように、自分たちが理論上は既に属している集団へと統合されるより、むしろより文明化された文化集団へと統合されることを想定していた。朝鮮人を日本人として同化すると明確化された目標は言葉だけのものであった。日本人を日本人として同化することを目指すことなど意味をなさない。

実際この区別はとりわけ植民権力が内部的、周縁的、外部的の臣民に対し推し進めた教育政策の違いにおいて現れていた。教育政策はふたつの理由から適切な例である。植民者が自分たちの学校へ被植民者を受け入れる条件は、当時被植民者に関して抱いていたイメージと、自分たちがもつ被植民者の将来に関しての未来図を示してくれる。より劣ったレベルに限定して人々を教育すること（もしくはまったく正式な教育を与えないこと）は被植民者が将来、より劣った社会的地位に立つ可能性を劇的に増大させた。内部的植民権力は教育目標を全般的で義務的なもの、つまり国家が子供たちを教育するための校舎を建設し、子供たちを運ぶのに必要なインフラ整備を終えるとすぐにすべての市民は学校に受け入れられると規定した。周縁的な植民地における植民者に関しては、教育への参加を促しはしたものの、一般的に言って学校への出席を義務づけることもなかつ

た。彼らはたいがい期間が短い上に教材が乏しく、ほんの少数の人しか利用することのできない非義務的な教育を被植民者——彼らは内部臣民と同じ教室で学ぶのが不適切と見なされた——に提供した。この点を適切に表現する言葉は“意図”といえよう。ふたつの状況とも当初近代教育を全住民に拡大するために必要な資源が不足していた。しかしながら内部的植民者はすべての住民に義務教育を拡大する自分たちの意図を宣言した。周縁的植民者は教育施設を増やすことは約束したかもしれないが、出席を義務化するという意図を鮮明にするまでには至らなかった。

植民者は別々の教育制度に加えて、内部的臣民と周縁的臣民の間の区別を維持する別の方法を考案した。本土との関係性に規定された植民地の地位は、それを支配する法的な規範を決定した。この地位はまた、政治組織に臣民らが参加できる形式と程度も決定した。周縁および内部的植民地の都市では、内部的臣民が現地との不快な感触や悪臭から自分たち自身を守るために都市内の特別な地域を占めたときに、この植民的関係が映し出された。互いの地域を行き来する植民者と被植民者の両者は、彼らがあたかも国境線を行き来するか、もしくは博物館に入ったかのように、これらの遠足を外国への冒険として記述した。ごみと悪臭について植民者によって残された叙述は、被植民者が自分で身の回りを管理できないのに、自己の主権を管理できるはずもないと広告するためにお膳立てされたモザイク的なイメージ作りに貢献した。

植民者が被植民地の人々に関して引き出したイメージには、時と場所を問わず驚くべき持続力を示すステレオタイプが含まれていた。エドワード・サイードが記すように、これらのイメージは被植民者から植民者を分ける「存在論的、認識論的区別にもとづく思考様式」を²³⁾形成した。支配する側の代理人は、文明人に要求される習慣や習俗を普及させることに失敗した無能な政府の犠牲者として被植民者を描き出した。彼らの住む時代遅れの環境は、ピエール・ブルデューが言うところの劣った「ハビトゥス」、つまり「社会化の過程を経て身に付けた図式化あるいは気質の組み合わせ」を反映した。²⁴⁾植

民者の心の中では、被植民者の劣ったハビトゥスは彼らの着るもの、彼らの料理、彼らの社会倫理および労働倫理、彼らの言語にすらその劣等さを反映させていた。植民者側の代理人たちの最初の仕事は、こうした違いをどのように扱うべきかを決定することだった。内部的植民政策は、統一された文化を創造するために多様な人々の間の文化的障壁を取り除くことであり、外部的植民地行政機構は、被植民者たちの伝統的制度の維持を彼らに促すことで植民者と被植民者の区別を下支えし、そして周縁的植民地の代理人は植民者と被植民者間の統合を説きつつも、一方で区別の壁を強化した。

ここまで我々は、植民者による決定に注意を向け、被植民者についてはほとんど注意を払ってこなかった。このことは不幸にも植民地の現実状況を反映している。植民者は植民地行政機構に関して決定をくだしたのだが、植民地化される側の人々——彼らこそこの決定に対して最も重要な寄与をおこなうはずであった——に直接的な意見の提供を求めることはほとんどないか、あっても少なかった。被植民者による反応は複雑で、別の論考を書くに値するほどである。フランツ・ファノンが「白人の文化、白人の美、白人の白さと結婚」した²⁵⁾ というように、多くの人々は必然的運命として彼らとの同化を受け入れた。また、別の者はナショナリストとしてのレトリックと物理的な反乱によって自国への征服に抗った。この両者の反応は、住民をひきつけると同時に、国民国家というより大きな関係性の中に人々がアイデンティティを置きなおすよう促した。植民者は、植民地化された人々が分断され弱められた社会的構造と、植民地支配に対してまとまって挑戦する彼らの能力を分断し弱めることになる植民地支配に対する彼らの反応の多様性を利用し尽した。これら諸党派が無党派層に対して有していた潜在的な支配力は、植民地当局がおこなった政治的決定に力を与えることもあったし弱めることもあった。

日本の膨張と同化政策

一般的に日本の歴史文献では、日清戦争終結により結ばれた日本の平和条約の一部として1895年に獲得した台湾領有が、植民地拡大へと日本が突き進み

始めた嚆矢であったと記される。植民地拡張への遅参者として日本を定義することが江戸時代の「鎖国」のイメージと、1868年に権力を担うことになった明治政府の「維新」のイメージを強くする。ほとんどの場合、江戸時代（1603-1868）は植民地拡大に乗り出す外国勢力から列島を守るために厳格な鎖国政策を実施した体制として描かれてきた。その結果、日本はこのころには国境線の拡張にほとんど興味をもっていなかったとされる。したがって日本の膨張は、後に明治期に始められたと、つまり国内を民族国家化するという政治的課題を推し進めた後に政府が乗り出したのだと、一般的に考えられている。この解釈は、上で論じた「植民地化」に関するもっと視野の狭い見方からも導き出される。

荒野泰典とロナルド・トビは個々別々に、徳川期日本の鎖国に対するイメージに挑戦した。彼らはまず徳川幕府は決して「鎖国政策」を始めたのではなく、外国との交易や外交の広範なネットワークに活発に参画していたと論じる。²⁶⁾ 徳川家、もしくは個々の藩は多くの機会をとらえてその国内に対する管理範囲を越えて、自分たちの影響力を周辺地域、すなわち北琉球や蝦夷に拡大した。²⁷⁾ 徳川家はこれらの地域を正式な植民地に編入することはなかった。徳川家はたとえフィクションであったとしても、主権領域としてそれらの地域の利害を扱った。この意味で徳川家の政治は、もっと正確に言えば、植民地拡大についての自覚と、時にはその地方的な利害を守るべくしばしば外国の介入への関心を明確化していた、用心深い外国人嫌いの政策と言いうる。明治期の日本は、これらの周縁地域を日本固有の領土へと公式的に編入することによってこのプロセスを継続した。

明治の日本（1868-1912）が徳川期の実践を継続したかもしれないことは、古来の習わしの「復古」としての1868年における「政変」の理念を疑わせる。このプロセスが革命的進歩だと論じる者もいる。²⁸⁾ 国内レベルでは、このプロセスは新しい（日本の）エートスにおける構成員の意識を内部的臣民の中に作りだすために、新しい社会的、政治的、経済的基礎をもとにした制度を取り入れた。²⁹⁾ 外交レベルでは、防衛を強化するために、直接的に日本の領土

の拡張に努めた。帝国の制度は明治維新の象徴的な中心として機能した。内部的、周縁的両方の植民地の拡張はこのプロセスを促進させた。この時期の終わりまでに日本はこのプロセスの初期段階を完了し、さらなる拡張に乗り出すための準備をおこなった。

³⁰⁾ 子供たちの大多数は学校に入学し、軍隊はふたつの強力な敵を打ち負かし、そしていまや明確にその支配下にある南方の沖縄と台湾、朝鮮、そして北海道と南樺太という周縁の獲得物が列島を取り囲むようになっていた。最大の脅威、つまり日本がアジアの利権を侵食しないようにと用心深く疑いの目で見ていた脅威は、これら併合した領域のその先にあった。日本の指導部は台湾を併合した1895年の直後に、植民地統治として同化の方針を固めた。しかし日本は徳川幕府が18世紀末に短期間蝦夷を支配して以来、すでにさまざまな形態の同化政策を実践していたのだ。日本は統一された言語や文化を日本列島の隅々にまで広めることによって、明治時代の始めから、より押し付けがましい内部的同化の形態を実践した。明治政府の役人は、琉球島や蝦夷の住民たちの統合にこれらの実践を適用しようとしたが、強要はしなかった。

韓国の学者たちは、日本の明治維新の主要な政策綱領としての日本の拡張を長いこと議論してきたが、彼らはこの解釈を歓迎するだろう。³¹⁾ 明治政府はその開始とともに、朝鮮に対する攻撃的な姿勢を見せ始めた。1875年から1876年にかけて、日本はアメリカの「砲艦外交」を真似て朝鮮政府に江華条約締結を強要したが、江華条約は、その後数十年にわたり結ばれ、朝鮮の主権をますます危うくすることになる一連の条約の最初のものであった。1881年に「紳士遊覧団」に加わった朝鮮人メンバーは、植民地的な拡張としての沖縄と北海道における日本の成果を認め、日本の領土拡張主義者らの矛先は最終的には朝鮮に向かだろうという懸念を抱いた。³²⁾ 日本人は、朝鮮独立を「保護」することにより中国の影響から朝鮮を解放するという、江華条約における重要な野心を強要し続けた。福澤諭吉は日本は朝鮮の「文明の教師」であると語り、日本は朝鮮の医者として患者の生活の様子について広く尋ね、朝鮮の独立を推進させるために良薬を処方しなければならないと説

明した。³³⁾ 自由党の大井憲太郎は、1884年の甲申政変における金玉均の失敗を救うため援助を要請して、資金を集めようと試み（「大阪事件」）、自由党が推し進めた汎アジア主義を通して、朝鮮の独立を維持する日本の責任を要約した。それは、「国家の独立」は犠牲にしたとしても日本は責任をもって朝鮮「民族の独立」は保護せねばならないというもので、「東洋はひとつ」への関心だった。³⁴⁾

1880年代の朝鮮において、異なる党派によって始められた改革の努力は、朝鮮政府もしくは外国勢力によってつぶされるまで、明るいい兆しを示していた。朝鮮政府は1880年代初頭から西洋諸国の政府と条約を協定し、外国への研修旅行を後援し、海外の学問を修めるため朝鮮人留学生を派遣した。これらの努力は、朝鮮との伝統的紐帯を近代的な装いのもとに再建しようとする中国のイニシアチブによって妨げられた。ユージン・キムとハンキョー・キムは、中国駐在武官の袁世凱は、より正確には「中国の太守」のような役割を負うため1885年に到着したと書く。柳永益の言葉を借りれば、彼の存在は、「朝鮮の独立を維持するために国を十分に富ませ強化しながら“隠者王国”を諸国家の家族の一人前のメンバーとなす」努力を抑圧した。³⁵⁾ カーク・W・ラーセンはつい最近、近代的制度と朝鮮をつなぐ中国の役割を考察し、当時の朝鮮における中国人の努力は、これまでの認識よりも「はるかに曖昧かつ複雑」だったと論じた。³⁶⁾

日清戦争における中国の敗北は二度目の近代化の努力を改革派と中央政府に促した。外国の観察者たちはその近代化の努力に対して賛否入り混じった評価をおこなった。ジャーナリストのアンガス・バルトはソウルにおけるインフラの改善に注目して、1904年に「古い秩序は新しい秩序へと道を譲った。住民たちは素早く外国との交際の結果を評価し、その結果、もう数年もすれば昔の首都のおもかげを見つけるのは難しくなるだろう」³⁷⁾ と書いた。ところが同年合衆国の国会議員であるホラス・アレンはセオドア・ローズベルト大統領の「東アジア担当の私的顧問」ウィリアム・ロックヒルに次のように書き送った。「この人々は・・・自分たちを管理することができないのです。彼らは今までずっと

そうであったように命令してくれる国を持たねばならないのです。それが中国でなくなった時、それはロシアか日本だったのです。そして彼らはそのうちのひとつから抜け出るや、すぐに恐ろしい混乱状況におちいって、自分たちを監督してくれるよう他の国に頼まなければならなくなるのです。……すぐさま日本に朝鮮を任せるべきです。」³⁸⁾ このように、より重要な問題は、朝鮮が改革できるかどうかではなくて、改革するという朝鮮の努力を国際社会が認めるかどうかなのであった。もちろん外国の観察者たちの批評が併合前の朝鮮の状態についての完全な物語を提供してくれるわけではない。しかしながら、当時世界の大国が日本に対して行使していたかなりの影響力を考慮すると、彼らの印象を無視することはできない。日本が「極東におけるあらゆる危機の元凶として朝鮮」³⁹⁾を挙げつつ半島の併合へと動いたとき、反対する外国の声はほとんど見られなかったのだ。

朝鮮末期についての歴史研究者は等しくこの時代の評価を決めかねたままである。多くの研究は朝鮮の改革努力が弱かった点に重点を置いた。ジェイムズ・パレスは大院君の政治貢献（1866-73）に重点を置いて研究しているが、朝鮮の「伝統的システムが強力な中央集権的君主的指導権への大きな変革を受け入れるのは不可能であった」⁴⁰⁾と主張する。マーティナ・デュークラは日本が1876年に朝鮮に強制した江華条約に続く改革努力を検討し、改革派が伝統的儒教体制とたもとを分かちのをいやがったと批判する。⁴¹⁾

愼鏞廈とバイパン・チャンドラは独立協会の改革運動（1896-98）を検討し、両者とも独立協会が成功するには革命的行動が必要であったと論じる。チャンドラは運動指導者の努力が成功するには準備が手薄であったことを示唆する。⁴²⁾しかし、李泰鎮は政権の強さに注目し、朝鮮の体制を改革しようとする高宗の努力は外国の、最初は中国人、後には日本人による介入によって阻まれたと、高宗を有能な君主として描写する。李泰鎮は朝鮮が停滞していたからではなく、近代化するための能力があったからこそ日本が半島を併合しようとする努力する動機となったと主張する。⁴³⁾

本書では朝鮮半島を吸収するための青写真を明治政府がもっていたとまでは主張しない。しかし、日本は植民地拡張が「富国強兵」を発展させるために重要な役割を演じることを十分弁えていた。⁴⁴⁾朝鮮の位置は日本にとって戦略的に重大であって、のどから手が出るほど欲しいものであった。そのこと自体が、そしてそれだけで半島の併合を正当化できるのではない。しかしながら朝鮮と日本の両者が感じた外国からの脅威、日本が朝鮮で行動するべく（主として彼ら自身のアジアにおける利益を保護するために）他の外国の勢力から受けた支援、そして朝鮮半島の戦略的に重要な位置が日本の韓国併合を最もありきたりのシナリオにする方程式を完成させた。

日本の同化政策はしばしば誤って戦時の皇民化政策と結びつけて議論されているが、同化政策は朝鮮を併合する前から始まっていた。台湾を帝国へ吸収した後の1895年に、日本はこの政策の得失について論議していた。1910年の議論では植民地当局が韓国の同化をおしすすめるペースおよび方向が考慮された。植民地大国としての日本の「比類なき」は、エリック・ホブズボームが適切にも「帝国の時代」（1895-1914）と呼んだ時期を特徴づける、抑制のない領土獲得のさなかにあつて、民族的に酷似した人々を同化しようとしたその試みにあつた。⁴⁵⁾しかし、日本はイギリス、プロイセン、そしてフランスの外部的植民地における努力より、そうした国々の周辺領土における努力に影響された。明治時代の同化政策に関する言説を概観すると「植民地化」に関する日本の見方が明らかとなるが、それは最も知られた例としてイングランド人による連合王国の形成、フランスによるアルジェリア併合、そして、アルザス及びロレーヌのプロイセンへの編入など、やや広い一連の例から構成されている。日本人は同化政策をスコットランドやウェールズのような領土、つまり一般的に同時代の文献では「植民地」とはみなされなかったところでの統治政策であると認識していた。日本人は、ほかのヨーロッパでの状況よりも朝鮮において同化政策をもっとうまく適用すべく、日朝の二つの民族が共有していた類似性を主張するため、朝鮮人を外国人と見ていた併合前のイメージを修正した。⁴⁶⁾このような議論には、同化政策が

本当に朝鮮の状況に最も適切な政策であったかどうかという、もっと困難な問題を扱うことが必要であった。日本人は自分たちの文化が朝鮮人たちの文化よりも優秀であると考えたが、だからといって自国の安全を確保するため、そんなにも大きな文化的変容を甘受せよと朝鮮に要求するのは正しかったのか。それとも完全な同化に代わりうるもので、かつ実行可能なものなど存在したのだろうか。

朝鮮での日本の行政に関わる要素は植民地の歴史叙述において十分に考察されてきた。⁴⁷⁾しかし、朝鮮におけるひとつの政策としての日本の同化政策を分析し評価する研究はほとんど行われてこなかった。本書は多くの点でこのギャップを埋めようとするものである。初めに、ヨーロッパとアメリカの例を検討することで、近代の植民地史の中に同化政策を位置づける。⁴⁸⁾日本人はこの政策を模倣し、それを採用するという自分たちの決定を正当化するため、これらの例を使用した。日本人は自分たちの成功度を測るための基準としても、西洋の例を使用した。ほかの国の同化の例について考察することは、この政策の日本での適用を評価しうる判断基準を提供してくれる。日本の植民地主義を世界で通用する共通の言葉で定義することによって、我々は、この同化政策の歴史について日本が侵略し、朝鮮が犠牲になったという単純なナラティブよりは、複数のナラティブが複雑に絡み合った事例として見ることができる。⁴⁹⁾

本書は日本が植民地政策として同化政策を選び取る過程と、韓国併合以前の獲得地から日本が学んだ教訓をも追究する。⁵⁰⁾戦前の歴史の大部分を通して国際社会における日本の不安定な地位が朝鮮政策に大きな影響をあたえた。日本は片方の攻撃的な目を獲得したい領土の方に据え、もう片方は慎重に西洋の反応に据えながら膨張した。⁵¹⁾しかし日本は韓国併合を準備していた時には、すでにより経験を積んだ植民国となっていた。内部的、周縁的配置における植民地作りのそれ以前の実地作業から学んだその教訓は、朝鮮における政策決定に潜在的に影響を与えており、したがってその点に関しては再検討の価値がある。

本書は、三番目の論点として、朝鮮における政策

の発展、つまり日本の同化政策が朝鮮半島の36年間の占領の間にどのように発展したかを追究する。⁵²⁾日本は次第にその政策が根付いてくると思い描いていた。日本人は朝鮮が彼らの伝統的文化を捨て、日本の文化を吸収するのに何十年あるいは一世紀ほどもかかるだろうと論じた。この態度は1930年代にも持ち続けられていたのであるが、そのころアジア大陸においては戦時の緊急事態であったため、総督府はこの過程を急激に加速させることになった。その時期を通じて、日本政府は朝鮮の人々に日本の臣民としての新しい地位を教えこむため教育やマスメディアを使った。日本にとってレトリック以上にきわめて重要な課題は、自分たち帝国臣民の仲間として朝鮮人を受け入れるよう日本人を促すため、植民者から被植民者を分離する壁を取り外すことであった。

ここで成功するには両民族による伝統的な相互蔑視のイメージを捨て去ることが必要であった。このイメージは日本の江戸時代には歴然としていたが、日本による朝鮮の主権侵奪に呼応して強まった。⁵³⁾併合のため日本は同化のレトリックに適応させるべくこのイメージを和らげざるを得なかった。このイメージは依然否定的であったが、日本人は、日本による適切な管理がおこなわれれば、この民族をもっと高いレベルの文明へと導けるだろうという希望を持っていた。彼らは朝鮮人が支援を必要としていると見ていたが、しかし無力なものとは見ていなかった。日本が描いていた大東亜共栄圏でいつか朝鮮人が協力者の役割を引き受けるだろうと日本人は想像することができたのだろうか。それとも日本人は朝鮮人をいつまでも劣った民族にいるだろうと信じていたのだろうか。日本の政策に対する多くの朝鮮人支持者は前者が同化の目標であると想定していた。日本のレトリックはそれを示唆していた。しかし、その政策はといえば、後者を示唆していた。日本の成功はそのレトリックとしての目標をその政策決定と一致させられるかどうかによっていた。

日本の同化政策の重要な批判者は朝鮮人だった。最近まで、朝鮮側の視点からのほとんどの研究は、日本の過酷な植民地支配に対する彼らの壮烈で確固たる抵抗を言い立ててきた。朝鮮人の愛国的抵抗は

高貴だった。これはまた史料豊富な歴史の一コマでもある。しかし、こうした研究は、この政策に多くの朝鮮人が激しく抵抗したという当然の事実以外、同化政策に関しての朝鮮人の見解についての我々の理解に何ものをも付け加えてくれるものではない。朝鮮は国民主権を受け入れる準備ができていないと信じたグループ、つまり、日本を支持する朝鮮人と漸進的自強改革を好んだ朝鮮人は、朝鮮の未来に対する議論の中で、日本の野心について、その当時そうであったほかのグループよりもっと洞察力に富んだ批判を提供した。これら朝鮮人の多くは日本が近代化した経験こそが有用なのだと信じていた。⁵⁴⁾ 彼らを分けた問題は朝鮮人のアイデンティティだった。日本から学ぶことは朝鮮人としての自強に役に立つのだろうか、あるいは同化された日本人として日本に統合されることに役に立つのだろうか。両グループは朝鮮人に対する日本の傲慢さを批判した。彼らは日本が朝鮮人を日本と同等のものとして認めなければ、進歩はなされ得ないということには一致していた。朝鮮人の中でもっとも熱心な日本支持者たちは日本が同化のレトリックに添った政策を提供するよう助言した。曹秉相のような朝鮮人たちは日本が今まで進歩してきたと論じ、この進歩はこれからも継続するだろうという確信をほのめかした。我々の調査は彼らの確信を正当化する証拠を求めて、日本の同化政策を検討することである。

注

- 1) 曹秉相「志願兵を子に持ちて」『朝鮮』(1940年3月号) 61-63頁。曹の次男は学徒出陣兵として入隊した。曹秉相については、김영진/역음『반민자 대공판기』제1권, 서울, 한풍, 1986년, 89쪽. Kyeong-Hee ChoiはAnother Layer of the Pro-Japanese Literature: Ch'oe Ch'onghūi's," *The Wild Chrysanthemum*" (*Poetica*, 52, 1999, 61-87) において妥協的ナショナリズムの考え方を扱う。
- 2) 朝鮮人はそれ以前日本軍において「義勇」通訳ならびに運転手として働いていた。1932年の上海事件の際には200名もの朝鮮人が日本軍に同行していた。1938年以後、彼らは義勇兵に含まれ、1944年以後は徴兵に組み込まれた。戦争中15万4907名の朝鮮人が日本軍内にいた。そのうち6377

名が戦死した。樋口雄一『皇軍兵士にされた朝鮮人』評論社、1992年、12-13、16頁。総督府の文書は、1938年に3000名の朝鮮人が朝鮮義勇軍の400の部署に徴募したことを明らかにしている。1942年には日本軍は25万名もの志願者の募集をみた。「朝鮮統治の皇民錬成の進展」(신주백/역음『일제하 지배 정책 자료집』17권, 서울, 고려서림, 1993년, 701쪽)。

- 3) 曹がいう過激派グループは申起旭の汎アジア主義者と独立を求めるナショナリストのグループに対応する。Gi-Wook Shin, *Ethnic Nationalism in Korea: Genealogy, Politics, and Legacy* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 2006), chap.1.
- 4) 曹「志願兵を子に持ちて」61、62頁。
- 5) すでに拙論において尹致昊が日本の協力者であったという非難を扱っている(“Loyal Patriot or Traitorous Collaborator? Reassessing Yun Ch'ih'o's Colonial Activities in Contemporary Japan-Korea Relations,” *Journal of Colonialism and Colonial History*) (e-journal, December 2006)。Koen de Cuesterは朝鮮人の協力について幅広く扱っている(“The Nation Exorcised: The Historiography of Collaboration in South Korea,” *Korean Studies* 25, no.2, 2001, 207-42.)。否定的な価値評価については反民族問題研究所編集の全三巻『친일파 99명』(서울, 도서출판 돌베개, 1993년, 2002)を参照。
- 6) 徐椿「徴兵制実施と半島人の感激」『朝鮮』(1942年7月号) 55-57頁。
- 7) 윤치호『윤치호 일기』11권, 1939년 7월 3일, 국사편찬위원회, 서울, 1986, 196쪽.
- 8) 徐「徴兵制実施と半島人の感激」56頁。
- 9) Lawrence Jamesの *The Rise and Fall of the British Empire* (London: Little Brown, 1994) は、インド、エジプト、南アフリカと白人居住地(カナダ、オーストリア、ニュージーランド)について各一章を当てているが、アイルランド、スコットランド、ウェールズについては数頁を当てているのみである。
- 10) Bruce Cumings, *The Origins of the Korean War: Liberation and the Emergence of Separate Regimes, 1945-1947* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1981), 7. 〈ブルース・カミングス『朝鮮戦争の起源』第一巻(解放と南北分断体制の出現 1945年-1947年) 鄭敬模/林哲共=訳(影書房、1989年) 42頁。〉以下も参照のこと。Gregory Henderson, *Korea: The Politics of the*

- Vortex* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1968), 72; ならびに Carter J. Eckert, Ki-baik Lee, Young Ick Lew, Michael Robinson, and Edward W. Wagner, *Korea Old and New: A History* (Cambridge Mass.: Harvard University Press, 1990), 256. 日本人の歴史家の中では、江口圭一『日本帝国主義史研究』（東京、青木書店、1998年）31、122頁。カミングスはのちにイングランド - アイルランド関係と日本 - 朝鮮関係の類似性を示唆する。*Korea's Place in the Sun: A History* (New York: W. W. Norton, 1997), 140.
- 11) Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism* (Orlando: Harcourt Brace, 1979), 223. 〈ハナ・アレント『全体主義の起源』2（帝国主義）大島通義／大島かおり共訳（みすず書房、1972年）。〉
- 12) Michael Hechter, *Internal Colonialism: The Celtic Fringe in British National Development, 1536-1966* (Berkeley: University of California Press, 1975) .
- 13) Harold Wolpe, "The Theory of Internal Colonialism: The South African Case," in *Beyond the Sociology of Development: Economy and Society in Latin America and Africa*, edited by Ivar Oxaal, Tony Barnett, and David Booth (London: Routledge & Kegan Paul, 1975), 231. Elia T. Zureik, *The Palestinians in Israel: A Study of Internal Colonialism* (London: Routledge & Kegan Paul, 1979) も参照のこと。
- 14) Partha Chatterjee, *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1993), 14.
- 15) Partha Chatterjeeは*Nationalist Thought and the Colonial World: A Derivative Discourse* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1986), 5-6.の中において、ナショナリズムの「世界標準」を導入するのに、イタリアやドイツのような西洋諸国はアジアの人々よりもはるかによく準備がなされていたという考えに反駁するために、Ernest Gellnerの Nations and Nationalism を引用する。
- 16) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London: Verso, 1991), 6. 〈ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体』(ナショナリズムの起源と流行) 白石隆／白石さや訳（書籍工房早山、2007年）、24頁。〉
- 17) Eamonn Callanはこの問いのいくつかを"The Ethics of Assimilation," *Ethics* 115 (April 2005) : 471-500. で扱っている。
- 18) 外部的植民地の例はここで挙げたりストよりもはるかに多いのであるが、第一次世界大戦へと至る数十年間のアフリカとアジアにおけるヨーロッパによる「領土獲得」の努力を含む。
- 19) John D. Fage, "British and German Colonial Rule: A Synthesis and Summary," in *Britain and Germany in Africa: Imperial Rivalry and Colonial Rule*, edited by Prosser Gifford and William Roger Louis, 691-706 (New Haven, Conn.: Yale University Press, 1967) .
- 20) イギリスはその多くの外部的植民地の獲得を植民地の中の「宝石」であり「生命線」であるインドを守るために必要であったと正当化した。James, *The Rise and Fall of the British Empire*, 204.
- 21) 内部的植民地主義はプロイセン当局のドイツ国家形成の、ピエモンテ王国のイタリア半島統合の、日本における薩摩や長州の指導層による徳川期の諸藩の統合への努力を含んでいる。
- 22) 周縁的植民地主義は以下のような状況で起きた。イングランドとウェールズ、スコットランド、アイルランドの統合、フランスによるアルジェリア征服、プロイセンによるアルザスとロレーヌの併合、アメリカ合衆国の短い再建期における黒人とネイティブ・アメリカン統合の試み。
- 23) Edward W. Said, *Orientalism* (New York: Vintage Books, 1979), 2. 〈エドワード・W. サイド『オリエンタリズム』今沢紀子訳（平凡社、1986年）、3頁。〉 コリンガムは「ブリテンの本体とインドを隔てている『感情の壁』の形成」に言及する。E. M. Collingham, *Imperial Bodies: The Physical Experience of the Raj, C. 1800-1947* (Oxford: Polity, 2001), 7 参照。
- 24) Collingham, *Imperial Bodies*, 2より引用。
- 25) Frantz Fanon, *Black Skin, White Masks*, translated by Charles Lam Markmann (New York: Grove Weidenfeld, 1967), 63. 〈フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武／加藤晴久訳（みすず書房、1998年）、85頁。〉
- 26) 荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京、東京大学出版会、1988年）と Ronald P. Toby, *State and Diplomacy in Early Modern Japan: Asia and the Development of the Tokugawa Bakufu* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1984). 〈ロナルド・トビ『近世日本の国家形成と外交』速水融／永積洋子／川勝平太訳（創文社、1990

- 年)。
- 27) Brett L. Walker, *The Conquest of Ainu Lands: Ecology and Culture in Japanese Expansion, 1590-1800* (Berkeley: University of Press, 2001) 〈ブレット, ウォーカー『蝦夷地の征服1580-1800——日本の領土拡張に見る生態学と文化』秋月俊幸訳(北海道大学出版会、2007年)〉; George H. Kerr, *Okinawa: The History of an Island People* (Rutland, Vt: Charles E. Tuttle, 2000).
- 28) Kenneth B. Pyleはこの文献について*The Making of Modern Japan* (Lexington, Mass.: D. C. Heath, 1996), 71-74で書評をしている。
- 29) たとえばCarol Gluck, *Japan's Modern Myths: Ideology in the Late Meiji Period* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1985); Byron Marshall, *Learning to Be Modern: Japanese Political Discourse on Education* (Boulder, Colo.: Westview, 1994); Sheldon Garon, *Molding Japanese Minds: The State in Everyday Life* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1997); Takashi Fujitani, *Splendid Monarchy: Power and Pageantry in Modern Japan* (Berkeley: University of California Press, 1996); そして Tessa Morris-Suzuki, *Re-inventing Japan: Time, Space, and Nation* (New York: M. E. Sharpe, 1998).
- 30) 山県有朋は首相として、この想定を1890年の帝国議会の開会式で明確にしたが、その時彼は次のように説明したのであった。“The independence and security of the nation depend first upon the protection of the line of sovereignty (shukensen) and then the line of advantage (riekisen). If we wish to maintain the independence among the powers of the world at the present time, it is not enough to guard only the line of sovereignty; we must also defend the line of advantage.” Pyle, *The Making of Modern Japan*, 135.より引用。なお原文は以下の通り。「けだし国家独立自栄の道に二途あり、第一は主権線を守護すること、第二には利益線を保護することである、其の主権線とは国の疆域を謂い、利益線とは其の主権線の安危に、密着の関係ある区域を申したのである、およそ国として主権線及利益線を保たぬ国はございません、方今列国の間に介在して一国の独立を維持するには、独り主権線を守護するのみにては、決して十分とは申されませぬ、必ず亦利益線を保護致さなくてはならぬことと存じます。」国立国会図書館憲政資料室編『憲政秘録：明治・大正・昭和』産
- 業経済新聞社出版局、1959年、149頁。
- 31) 박영제는日本による朝鮮侵入を明治維新の「産物」と呼ぶ。조항래「근대 일본의 한국 인식」『일제의 대한 침략 정책사 연구』서울, 현음사, 1996, 7-37쪽. 이광래は、この歴史を日本の「アジア・シンドローム」というコンテクストの中において考察する。つまり日本の「大東亜共栄圏」に対する福澤諭吉の「脱亜論」である。「일본의 '아시아주의' 속의 한국인식」『한일양국의 상호인식』서울, 국학자료원, 1998. 朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配』青木書店、1993年; 차기백「일본제국주의 식민정책의 형성 배경과 그 전개」『일제의 한국식민통치』서울, 정음사, 1985, 12-44쪽も参照。海野福寿『韓国併合史の研究』東京、岩波書店、2000年; Hilary Conroy, *The Japanese Seizure of Korea, 1868-1910: A Study of Realism and Idealism in International Relations* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1960); and Peter Duus, *The Abacus and the Sword: The Japanese Penetration of Korea, 1895-1910* (Berkeley: University of California Press, 1995). 〈ピーター・ドウス/小林英夫編『帝国という幻想——「大東亜共栄圏」の思想と現実』(青木書店、1998年)〉
- 32) 정옥자「신사유람단고」『역사학보』27, 1965, 105-42쪽.
- 33) 福澤諭吉「朝鮮の問題」時事新報社編『福澤全集』第8巻所収、591-93頁(東京、国民図書、1926年)。이광래は福澤が1884年のクーデタの試みまではアジアの発展を推し進めることを望んでいたが、その後、彼は「脱亜論」を提起したと論じた。彼の「일본의 '아시아주의' 속의 한국인식」208-9쪽参照。
- 34) 平野義太郎『大井憲太郎』(東京、吉川弘文館、1965年) 232-33頁。
- 35) Young Ick Lew, “Yüan Shih-k'ai's Residency and the Korean Enlightenment Movement (1885-94)”, *Journal of Korean Studies* 5 (1984) : 63. C. I. Eugene Kim and Kim Hankyo, *Korea and the Politics of Imperialism, 1876-1910* (Berkeley: University of California Press, 1968), 64-65も参照。
- 36) Kirk W. Larsen, *Tradition, Treaties, and Trade: Qing Imperialism and Choson Korea, 1850-1910* (Cambridge, Mass.: Harvard University Asia Center, 2008), 161-62.
- 37) Angus Hamilton, *Korea* (New York: Charles Scribner's Sons, 1904), 25-26.
- 38) Howard K. Beale, *Theodore Roosevelt and the*

- Rise of American World Power* (Baltimore: Johns Hopkins, 1969), 319. Fred H. Harrington, *God, Mammon, and the Japanese* (Madison: University of Wisconsin Press, 1966) も参照。合衆国使節団团长としてのアレンの報告書については、Scott S. Burnett, ed. *Korean-American Relations: Documents Pertaining to the Far Eastern Diplomacy of the United States*, vol. 3: *The Period of Diminishing Influence, 1896-1905* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1989), 155-93, を参照のこと。
- 39) “An Important Talk on Annexation,” *The Japan Times* (August 30, 1910).
- 40) James B. Palais, *Politics and Policy in Traditional Korea* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1975), 272. その後の研究においてPalaisは朝鮮半島で後になって必要な改革の実施を妨げたのは社会的政治的な構造のこの融通性の欠如、つまり「失政、内部で争い合っていた官僚の党派主義、不公平な徴税、富の集中、責任の回避、国土防衛力の低下」であったと論じる。*Confucian Statecraft and Korean Institutions: Yu Hyŏngwŏn and the Late Choson Dynasty* (Seattle: University of Washington Press, 1996), 1004.
- 41) Martina Deuchler, *Confucian Gentlemen and Barbarian Envoys: The Opening of Korea, 1875-1885* (Seattle: University of Washington Press, 1977), 222-23.
- 42) Shin Yong-ha, *Modern Korean History and Nationalism*, translated by N. M. Pankaj (Seoul: Jimoondang, 2000) 139-40; Vipin Chandra, *Imperialism, Resistance, and Reform in Late Nineteenth-Century Korea: Enlightenment and the Independence Club* (Berkeley: University of California Press, 1988), 215.
- 43) 李泰鎮『東大生に語った韓国史』鳥海豊訳（東京、明石書店、2006年）。Yi Tae-Jin, *The Dynamics of Confucianism and Modernization in Korean History* (Ithaca, N.Y.: East Asia Program, Cornell University, 2007). 特に第3部も参照のこと。
- 44) この理解は1868年の明治維新以前から見られた。Donald Keene, *The Japanese Discovery of Europe, 1720-1830* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1952), 176-204. ならびに Bob Tadashi Wakabayashi, *Anti-Foreignism and Western Learning in Early Modern Japan: The New Theses of 1825* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1991) 参照のこと。
- 45) Eric Hobsbawm, *The Age of Empire, 1875-1914* (New York: Vintage Books, 1987). 〈E. J. ホブズボーム『帝国の時代』1 (1875-1914) 野口建彦／野口照子共訳（みすず書房、1992年）。〉
- 46) 江戸時代の日本人が朝鮮人を外国人とみていた例については、以下参照。Ronald P. Toby, “Carnival of the Aliens: Korean Embassies in Edo-Period Art and Popular Culture,” *Monumenta Nipponica* 41, no. 4 (1986) : 415-56. ならびに池内敏『近世日本と朝鮮漂流民』（東京、臨川書店、1998年）。
- 47) 日本による植民地政策についてのもっとも包括的な研究のひとつは、大江志乃夫・三谷太一郎・小林英夫・若林正文・浅田喬二・後藤乾一・高崎宗司・川村湊らにより編集された8巻本の岩波講座『近代日本と植民地』（東京、岩波書店、1993年）。日本の言語政策については、以下を参照。安田敏朗『帝国日本の言語編成』（横浜、世織書房、1997年）ならびに李鍊『朝鮮言論統制史——日本統治下朝鮮の言論統制』（東京、信山社、2002年）。日本の教育政策については、金富子『植民地期朝鮮の教育とジェンダー』（横浜、世織書房、2005年）参照。
- 48) フランスの例は同化政策の歴史についてきわめて興味深い研究を生み出してきた。以下参照のこと。Raymond F. Betts, *Assimilation and Association in French Colonial Theory, 1890-1914* (New York: Columbia University Press, 1961). ならびに Eugen Weber, *Peasants into Frenchmen: The Modernization of Rural France, 1870-1914* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1976). 小熊英二「差別即平等——日本植民地統治思想のフランス人種社会学の影響」『歴史学研究』662号（1994年）: 16-31頁の中において、日本に対するフランスの影響を考察している。
- 49) Gi-Wook ShinとMichael Robinsonが編集した朝鮮のコロニアル・モダニティに関する著書における素晴らしい紹介を参照のこと。*Colonial Modernity in Korea* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1999), 1-18.
- 50) 台湾の植民地史研究者たちはこの問題に対してもっと積極的である。以下参照。Leo T. S. Ching, *Becoming “Japanese”: Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation* (Berkeley: University of California Press, 2001). ならびに陳培豊『同化の同床異夢』（東京、三元社、2001年）。韓国の場合については、以下参照。駒込武『植民

地帝国日本の文化統合』(東京、岩波書店、1996年) ならびに최석영 『일제의 동화이데올로기의 창출』 서울, 서경문화사, 1997. 小熊英二は日本による植民地の境界づけを、小熊英二『日本人の境界』(東京、新曜社、2002年)で検討している。

- 51) この用心深さはとりわけ朝鮮における最初の独立運動である三・一運動後には明らかであった。Frank P. Baldwin Jr., “The March First Movement: Korean Challenge and Japanese Response” (Ph.D. diss., Columbia University, 1969) . 長田彰文『日本の朝鮮統治と国際関係——朝鮮独立運動とアメリカ』(東京、平凡社、2005年) ならびにDae-yeol Ku, *Korea Under Colonialism: The March First Movement and Anglo Japanese Relations* (Seoul: Seoul Computer Press for Royal Asiatic Society, 1985) .
- 52) Dong Wonmo, “Japanese Colonial Policy and Practice in Korea, 1905-1945: A Study in Assimilation” (Ph.D. diss., Georgetown University, 1969) ; Dong Wonmo, “Assimilation and Social Mobilization in Korea,” in *Korea under Japanese Rule*, edited by Andrew C. Nahm, 146-82 (Kalamazoo: Center for Korean Studies, Western Michigan University, 1973) . 長田彰文は『日本の朝鮮統治と国際関係』の中で、三・一運動までの日本の植民地政策について検討している。
- 53) Duus, *The Abacus and the Sword*, chap. 11 参照。
- 54) 英語による主な研究は、Michael Edson Robinson, *Cultural Nationalism in Colonial Korea, 1920-1925* (Seattle: University of Washington Press, 1988) ; Kenneth M. Wells, *New God, New Nation: Protestants and Self-Reconstruction Nationalism in Korea, 1896-1937* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1990) . ならびに Shin, *Ethnic Nationalism in Korea*.

付記

本邦訳は、Mark E. Caprio, *Japanese Assimilation Policies in Colonial Korea, 1910-1945*, University of Washington Press, 2009の序章の部分を翻訳したものである。我々三人は日本支配下の朝鮮半島の状況を知るために、さまざまな論文の輪読会を続けてきたが、昨年からは読み始めたのが、カプリオ氏のこの書物であった。最終的には本書全体の翻訳を考えているが、まずはその序章のみを埼玉学園大学の紀要に掲載してもらうことにした。なお、この輪読会には埼玉学園大学の卒業生である鬼木

順子氏も参加されている。この邦語訳を作られたのは、李慶姫氏と徳間一芽氏であり、赤阪は二人の訳文を調整し、用語を統一しただけであることをお断りしておく。